

第13回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（優秀賞）】

手縫いのブックカバー

市菌 勢津子・神奈川県横浜市

そのブックカバーを初めて目にしたのは、四年前の夏。買い物帰りに立ち寄った戸塚駅近くの書店だった。

それは市松模様とか矢絣など、着物や手ぬぐいによく見られる日本文様柄の木綿の布を継ぎ合わせたもので、とても粹に映った。手に取って開くと、中央に二本の細い紐が葉として挟み込まれている。これはいい。だが値札を探ると、買いたい本よりはるかに高い。後ろ髪を引かれる思いで、私はそのとき、本だけ買って帰った。

季節が変わり、夫が新型コロナウイルスに感染した。重症化し、辛うじて命は助かったものの、入院が長引く。病院は遠かった。

秋も深まってきた頃、夫に頼まれて立ち寄った横浜駅近くの書店で、私は再び、布のブックカバーと出会う。それは濃い紫色のむら染めの布と、秋草を散らした薄紫色の布を継ぎ合わせたカバーで、疲れ果てた私の心に、スッポリとはまった。

「この紫いいでしょう？ちようど今、並べたところなの」

着物を着せたら間違いないかのような年配の女性が、私に声を掛けてきた。

髪をアップに結び、その身だけでなく話し方までふくよかな彼女は、ブックカバーだけでなく、小物を縫って販売している会社の社長だった。横に広がる臨時特設コーナーを見渡すと、見覚えのある、あの日本文様柄も並んでいるではないか。値段はやはり、買いたい本より高い。けれど私は、手にしているブックカバーを、再び棚に戻す気には、どうしてもなれずにいた。私の目には、ブックカバーの紫色のグラデーションが、生まれ育った故郷、信州の秋の夕暮れと重なって映っていたのだった。

会計を済ませた私に、「鎌倉でお教室をやっているのよ。よかったらいらして。ブックカバーの作り方も教えて差し上げますよ」

その言葉にすがりつくように、鎌倉にある社長宅兼教室に向向いたのはその二週間後。

その日は、私と同年代ぐらいの女性二人が、トートバッグの作り方を習いに来ていた。大きなテーブルに、横並びで座り、黙々と針を進めている。手縫いだ。ミシンは一台だけ、よそ者のように、テーブルの隅に追いやられていた。

「ミシンは使わないんですね」思わず私が口にする、「手縫いの方が落ち着くのよね」

手を動かしたまま、生徒の一人が答え、隣の一人も、首を上下に振った。

「このお二人はね、看護師さんなのよ」

社長兼先生の言葉を聞いた途端、私の口から夫の病状やら、抱えていた不安やらが一気に溢れ出す。先生は勿論、目の前の二人までが、時々針を休めながら、私の話に耳を傾けてくれた。その日、生徒の二人は、トートバッグ完成に至らなかつたはずだ。私は、心の重荷を随分と軽くさせてもらえたところで、先生と次回の約束をし、早々と教室を後にしたのだ。た。

裁縫箱を持って、再び鎌倉の教室に足を運んだのは、それから暫くしてのこと。

先生は、日本文様柄を含む和テイストの布を何枚か用意して、待っていてくれた。

初めて縫うブックカバーとして、私が選んだのは、臙脂に白の横縞の柄と、華やかな草履が幾つも描かれた柄の布だった。この二枚の布を継ぎ、裏面に派手な緑色の布を重ね、二本の細い紐を挟んで、チクチクと縫っていく。二人の娘がまだ幼かつた頃、ミシンで子供服を縫っては着せていた私には、手縫いという作業がとても新鮮に感じられた。そして何より、手縫いは無心になれた。

この四年間で、私が縫ったブックカバーは百枚近く。手芸店に立ち寄っては、布を手に取り、柄の組み合わせを考えるのも楽しかつた。モダンな柄が多いが、和モダンもいい。

読みたい本の物語から想像し、選んだ柄で縫い上げたブックカバーを、初めて本に被せたときは、読み始める前から胸がときめいた。

もはやブックカバーそのものがストーリーで、本を取り出す際の目印にもなつた。

読書好きの身内や友達に、さりげなくプレゼントしては喜ばれたのも嬉しかつたが、私自身も救われていたのだと思う。

夫は退院後、一年半に渡る在宅介護も叶わず、一昨年の夏、六十五歳の若さで逝ってしまった。書店に私を連れ出しては、

「この本買って」と、ねだる人だった。

三回忌を迎えた今年、お洒落だつた夫が、生前愛着していた二枚のチェック柄のシャツに、思い切つてはさみを入れた。一針一針縫い合わせ、ブックカバーに仕立て直してみた。

夫の部屋にあつた、藤沢周平の『橋ものがたり』の文庫本に着せて、「さあ行こう」と、連れ出している。